《クラフトマン》

工芸職人はセカンドライフを謳歌する 3

Ryuuichi Suzuki

著 鈴木竜一

illu ゆーにっと

主な登場人物

MAIN CHARACTER

ウィルム

本作の主人公。
ブラックな商会を
クビになったのを機に、
何でも作れるクラフトスキルで、
セカンドライフを謳歌
しようと決めた。

ルディ

ウィルムの相棒。巨大化して
人を乗せることも可能。
何かと頼れるすごいやつ。

エリノア

人魚族の美少女。
ウィルムたちに国を
救ってもらった。

エリ・タチバナ

冒険者パーティー
【月光】のリーダー。
アキノの母親でもある。

ラストン・バーネット

ジェフの息子。ウィルムを
敵視している。

ジェフ・バーネット

悪名高いバーネット商会の
代表。腹黒い性格。

ウィルムの仲間たち

ミミュー

ソニル

レメット

アキノ

リディア

第一章　謎の冒険者

バーネット商会で長らく工芸職人（クラフトマン）として働いていた俺は、紆余曲折（うよきょくせつ）を経て、メルキス王国に新しくできたヒカリ村の村長をやっている。

この数ヵ月……本当にいろんなことがあったな。

バーネット商会をクビになった直後はさすがに目の前が真っ暗になったけど、もともとあそこの超ブラック体質には辟易（へきえき）していたので、前向きに捉えるようにしてバーネット商会の工房を去った。

それからは、メルキス王国のガウリー大臣やアヴェルガ家が助けてくれたのもあり、贅沢はできないとしても、何不自由ない生活が保証された。

それで、森の中の小さな小屋で物づくりライフを楽しもうと思っていたのだが……まさか小さな小屋があっという間に村にまで拡大し、おまけに自分が村長となるなんて。

人生は何が起こるのか、本当に分からないな。

さらに村長としての仕事だけでなく、最近では人魚族の国で起きたクーデターを止めるために奔走したり、職人として以外にもいろんなことをやるはめになるとは……。

そんなふうにいろいろあったが、ヒカリ村では今日も一日の終わりに賑やかな宴会が行われている。

陽気な音楽を演奏し、人々は自由気ままに踊ったりお酒を飲んだり食事を楽しんだりしていた。

宴会を楽しんでいると、アヴェルガ家のメイド長であり、今はこのヒカリ村で暮らしているアニエスさんから、ヒカリ村に冒険者が駆け込んできたと知らされる。

なんでも、近くで何やらトラブルがあったらしい。

宴会の楽しい空気を止めるわけにはいかないので、他のみんなにバレないよう相棒のルディを肩に乗せてこっそり抜けだす。

アニエスさんの話では、すでに村人たち数人が先行しているという。

◇　◇　◇

たどり着いたその場所には、村人であるピーターさん、テイトさん、クリンさん、ランディさん、

ホルテさんの姿があった。そしてその横には、助けを求めてきたと思われる冒険者がふたり立っていた。

一体何があったのだろうと近づくが、周囲の光景に思わず足が止まった。

「こ、これは酷い……」

目の前には、負傷して倒れている数人の冒険者が地面に横たわっていた。薄暗いため、正確に何人いるかは把握できないが、今見えているだけでも十人はいる。

「あっ、ウィルム村長！」

俺が到着したことに気がつくと、村人たちが駆け寄り、状況を教えてくれた。

助けを求めてきた冒険者のひとりはダニーさんという人で、パーティーのリーダーを務めているらしい。年齢は俺よりも上で四十代前半くらいか。白髪交じりの黒髪に、切れ長の目が特徴的でダンディな中年男性だ。

彼から詳しい事情を聞きたいところだが、怪我人たちの治療が先決だな。

「安心してください。あなたの仲間は助けますよ」

「す、すまない……感謝する……」

そう口にした瞬間、ダニーさんは意識を失った。平静を装ってはいたがかなり無理をしていたらしい。

「アニエスさん、ダニーさんをお願いします」
「お任せください」
「ピーターさんとテイトさんは村へ戻って応援の要請を。クリンさん、ランディさん、ホルテさんは俺と一緒に怪我人の状態を確認しましょう」
「「「「おう！」」」」
素早く指示を飛ばすと、みんなすぐに行動を開始してくれた。
とりあえず怪我の状態を確認していこう。
「俺の声が聞こえますか？」
「うぅ……あぁ……」
意識の確認をしてみるも、ハッキリとした返事は誰からもなかった。
これは思ったよりも深刻だな。
「怪我もそうですが、混乱しているようですね」
医療用の薬草を扱っている商人のランディさんは、「専門家ではないので詳しいことは分かりませんが」と前置きをしつつ、これまでに培ってきた経験と知識から分析していた。
ピーターさんとテイトさんには医者も一緒に連れてくるように伝えておいてあるから、とりあえず医者に診てもらおう。

しばらくすると、アキノがグレアム医師を馬に乗せてやってきた。
村へと戻ったピーターさんとテイトさんから事情を聞き、それならすぐにでも医者が必要だろうとひと足先に出てきたらしい。
「村長さん！　怪我人はどこですか！」
「こちらです！」
俺は、村に住むグレアム医師を倒れている男性のもとへと連れていく。
「話には聞いていましたが、数が多いですね」
「えぇ。なので、怪我人を村へ連れていこうと思っています」
「それがいいですな」

その後、応援に駆けつけてくれた村人たちにもお願いし、彼らが持ってきた荷台付きの馬車と巨大化したルディによる負傷者の移送が始まる。
作業中、グレアム医師を連れてきたアキノが何かに気づいて作業の手を止めた。
「何かあったのか、アキノ」
「い、いえ……。実は、パーティーのリーダーだというダニーという男性ですが、私が【月光】で活動していた頃にその名をよく耳にしました」

アキノは母であるエリさんがリーダーを務める冒険者パーティー【月光】で幼い頃から冒険者として英才教育を受けてきた。エリさん自身が有名な冒険者だし、きっと優秀な同業者の名前は頻繁に耳へ入る環境だったんだろう。

おかげで、彼らのことがなんとなく分かった。

「彼らは紳士的で有名な冒険者パーティーです。特にリーダーのダニーという人物は業界でも一目を置かれるほどの実力者。母も『できればこのパーティーとは争いたくない。戦えば双方無事では済まないだろうからな』と口にしていましたよ」

「そ、そんなに……」

あのエリさんがそこまで相手を高く評価するなんて珍しいな。

ただ、「紳士的」という評価はさっきのダニーさんの行動を見ていれば納得できる。

いつ倒れてもおかしくないほどの状態にもかかわらず、仲間の救出を優先してずっと耐えていたんだ。ようやくみんなが助かると知った直後に気を失ったことからも、強い意志と仲間想いの優しさを持ち合わせた人物だと分かる。

いずれにしても、ここにいる人たちを死なせるわけにはいかないな。

「すぐに怪我人たちを村まで運びましょう。ルディ、おまえにも頑張ってもらうぞ」

「キーッ！」

相棒はヤル気満々のようだ。頼りになるヤツだよ。

ルディのヤル気に触発されたのか、「俺たちも負けちゃいられねぇぞ！」と村人たちも奮起し、手際よく怪我人たちを診療所へと搬送していく。

宴会は中止となってしまったが、この場合は仕方がない。

それにしても……この村の近くにはモンスターもめったに出ないというのに、どうしてこんなにも大勢の冒険者が来ているんだろう？

おまけに、ダニーさんたちはあのエリさんも戦いを避けるほどの実力者――それにもかかわらず、ここまで追い込まれるなんて。

救出作業でバタバタする一方で、俺の心中には言い知れぬ不安が広がり始めていたのだった。

◇　◇　◇

負傷した冒険者たちの移送と治療。

すべてが終わる頃には空が少しだけ明るくなり、朝霧が立ち込めていた。

診療所にあるベッドだけではすべての負傷者を寝かせることができなかったため、俺や村人のベッドも貸しだしてなんとか対応する。

「そんなことがあったなんて……」
「言ってくれたら飛び起きて手伝ったのに！」
ミミューとソニルは宴会の途中で家に戻って寝てしまったため、一連の騒動は起床してから知った。
……まあ、驚いただろうな。
朝起きて部屋から出ると、俺やレメット、アキノにリディア、そしてルディまでもが疲れてぐったりしていたのだから。
ちなみに、負傷した冒険者たちを診察したグレアム医師によると、全員命に別状はないらしく、それを聞き届けると、皆緊張が解けて一気に疲労が押し寄せてきたのだ。
少し休息を挟んでから、冒険者たちの容態を改めて確認するために、レメット、アキノ、リディア、ソニル、ミミューとともに診療所へと足を運ぶことにした。
もしかしたら、意識が戻っている人もいるかもしれないし、できれば早いうちに詳細な事情を聞いておきたいと思ったからだ。

「おや、ウィルム村長。随分と早いじゃないか」
「彼らの様子が気になってしまって……それで、どうですか？」

「今のところみんなぐっすり眠っとるよ。しかし妙な話だな」
診療所のベッドに横たわる冒険者たちを眺めながら、グレアムさんは首を傾げた。
「彼らの怪我の状態はどう考えてもモンスターに襲われたものだ」
「仲間割れが起きたとか、別の冒険者パーティーか賊と交戦したという可能性もあるのでは？」
「ワシもそれを考えたが、負傷者の状態からして人によるものではないだろうな」
そう言いながら、すぐ近くのベッドで寝ていた冒険者の腕を指さすグレアムさん。
見ると、腕は治療済みであるが、大きく湾曲したようでよほどの怪力によってへし折られたらしかった。
だが、そうなるとますます謎が深まる。
彼らはきっとどこかから逃げてきたのだろうが、この近くでそんな凶悪なモンスターが出現したという話は聞いたことがない。
一体彼らはどこで何に襲われたというのか。
「でも、どうしてこの方たちはそのような状況に……」
俺と同じ疑問を口にしたのはミミューだった。彼女は心配そうに寝ている男性の顔を見つめながら、答えを求めるように俺の方へと視線を向けた。
「実力ある有名な冒険者パーティーをここまで追いつめるほど強いモンスターがこの近辺にいるの

でしょうか？」
不思議そうに首を傾げるレメット。
とりあえず、俺たちの暮らすヒカリ村のすぐ近くで何か異変が起きているのは間違いないようだ。
そう考えていたら、どこからともなく声が聞こえた。
「う、うぅん……」
「っ！　ウィ、ウィルム村長！　意識が戻ったようです」
診療所の者の声に反応して、ベッドに目をやる。目を覚ましたのはギリギリまで仲間たちを気遣っていたダニーさんだった。
俺はベッドの側まで行き、声をかける。
「目が覚めましたか？」
「こ、ここは……」
「ヒカリ村という場所です」
「そ、それはもしや……最近新しくできたという……」
「えぇ、たぶんそれで合っているかと」
「おぉ……やっとたどり着けた……」
ダニーさんは大きく息を吐いたが、すぐに痛みが襲ってきたようで、うめき声をあげながら悶(もだ)え

だした。
「大丈夫ですか、ダニーさん」
「あ、ああ……どうやら無茶をしすぎたようだ……」
それから彼は、経緯を説明してくれた。
「……実は、俺の住んでいるサーデル王国で新しくダンジョンが発見されたんだ」
「ダンジョン……」
ダンジョンには、これまで俺自身はあまりかかわったことがない。あるとしても、アキノの所属する冒険者パーティー【月光】絡みでの案件くらいだ。
……ただ、以前から関心はあった。ダンジョンといえば素材の宝庫。職人からすればこれほど魅力的な場所はない。
ちょっとワクワクしてきた俺だったが、対照的にダニーさんの表情は冴えないまま。
ダンジョン絡みでトラブルがあるらしい。
「ダンジョンで何かあったんですか？」
「まあな」
ダニーさんは少しためらったあと、ひとつ頷いてから話を続けた。
「俺はサーデル王国からそのダンジョンを調査するように依頼を受け、パーティーメンバーと一緒

に探索へと乗りだしたのだが……途中ではぐれてしまってな。おまけに道中でこれまでに遭遇したことのないモンスターと戦闘になり、命からがら脱出してきたんだ」
「あなたほどの冒険者がそこまで苦戦するなんて……一体どんなモンスターだったんです？」
「それが、姿をハッキリと確認できなかったんだ。そのせいで反撃もろくにできず……情けない限りだ」
　この情報に一番驚いていたのはアキノだった。そりゃあ、あのエリさんが争いたくないっていうほどの相手だもんな。相当な実力者であることは間違いないだろうが、それがほとんど壊滅状態というわけだから、そういう反応になるのも頷ける。
　そんなアキノに気づき、ダニーさんが目を見開く。
「君は……もしやエリ・タチバナの娘か？」
「はい。アキノ・タチバナです」
「噂は耳にしている。母親に負けず劣らずの凄腕らしいな。まさかここで君に会えるとは思ってもみなかったな」
　ダニーさんの強張っていた表情がわずかに緩んだ。
　そして、いよいよ本題へと移る。
「さっきの話の続きだが……モンスターの襲撃から逃れているうちに、サーデル王国ではない別の

ダンジョンの出口へとたどり着いたんだ。遠くにかつて訪れた港町ハバートが見えたのでここがメルキス王国だとすぐに分かった」
　さらにダニーさんが続ける。
「君の噂は聞いていた。バーネット商会に所属する凄腕の職人であり、現在はメルキスのガウリー大臣からこの村の村長に任命されたと。最近では人魚族の国で起きたクーデターを鎮めるのにもひと役買ったそうじゃないか」
「そ、そんなことまで……」
　さすがの情報収集力だ。
「地理的に、もしかしたら噂になっている君の村が近くにあるのではないかと思ってさまよっていたのだが、予想が当たってくれて助かった」
「た、大変でしたね。でももう大丈夫です。ゆっくり傷を癒していってください」
「……いや、のんびりはしていられないんだ」
　そう言うと、ダニーさんはベッドから起き上がろうとする。
　しかし、まだ傷が完治していないためすぐに痛みが全身を貫き、動きが止まった。
「まだ無茶はいけませんよ！」
「そうだ！　あんたの傷も決して浅くはないんだぞ！」

俺とグレアムさんで動きだそうとするダニーさんの説得をする。
だが、彼に応じる様子は見られない。
そして、彼はその行動の理由について語った。
「ダンジョンには逃げ遅れた仲間が……」
「えっ!?」
どうやら、ダニーさんの仲間がまだダンジョンに取り残されているらしい。
今すぐにでも助けたいという気持ちは分かるが、歩くのすらやっとの彼がそのダンジョンへ行ったとしても仲間を救えるとは思えない。
恐らく、普段のダニーさんならばこのような冷静さを欠いた判断をしないだろう。でなければ、あのエリさんが警戒するほどの実績をあげられないはず。裏を返せば、それだけ逼迫(ひっぱく)した状況であると言えた。
「ウィルム殿……助けてあげられないか」
訴えかけるような眼差しを向けてきたのは、アキノだった。
ダンジョンの恐ろしさを誰よりも理解している彼女だからこそ、ダニーさんの焦る気持ちや、残された仲間たちの不安や恐怖が分かるのだろう。
正直、残された者たちが生き残っているかどうかは不明だ。それに、一流冒険者パーティーであるダニーさんたちでさえ全滅しかけているような場所だ。下手に焦って足を踏み入れれば、こちらが全滅してしまう可能性があった。
また、気になるのはそれだけじゃない。
このダンジョン、ダニーさんの話を聞く限り、ふたつの国をまたいで存在しているのだ。
つまり、ダンジョンへの侵入は国家間のトラブルになりかねない。そのため、事前にガウリー大臣へ話を持っていき、判断を仰ぐ必要がある。
だが、人命がかかっている以上、それを悠長に待っている時間もないだろうな。
そこで俺は、アキノ、ソニル、リディアの戦闘スペシャリスト三人に、村に滞在しているダンジョン探索経験者とともにダンジョンへと潜るように頼んだ。とにかくそのメンツで取り残されている冒険者たちを救出することを優先させたのである。
その一方で、俺とレメットとミミューの三人は王都へと向かい、一刻も早くこの事態をガウリー大臣へと報告する。事後承諾という形にはなってしまうが、これは仕方ない。
諸々の事情を含め課題は多いものの、とりあえずこの対処方法をダニーさんへ提案した。
「ありがたい。感謝するよ」
本当はすぐにでもダンジョンへ突入し、仲間を救いだしたいところだろうが、国際的にデリケートな問題であることと、きちんとした準備を整えなくては自分たちの身も危険にさらされると理解

しているため、万全の準備を整える時間が必要だという理由から即座に行動へと移るのを踏みとどまったようだ。
「必ず仲間を助けだしましょう、ダニーさん」
「ああ」
俺がダニーさんと握手を交わすと、まるでそれが合図であったかのように意識を失っていた冒険者たちが目覚め始めた。
中には事態を思い出し、救助作戦に参加したいと申し出る者もいる。
本来ならゆっくりと傷を癒してほしいところではあるが、未知のダンジョンへ乗り込むということで少しでも経験のある人手が必要だ。
そこで、グレアムさんの診察を受けて軽傷と判断された者のみ、俺たちに同行してもらうことになった。
結果、五人の冒険者が新たに加わった。
アキノやダニーさんたちが探索の準備を整えている間、俺は王都へ向かう前に村の様子をチェックしていくことにした。

◇　◇　◇

ほとんど徹夜になってしまったが、こんなのバーネット商会にいた頃は日常茶飯事だったし、なんだったら前世の社畜時代にも何度か経験した。
そう思うと、ここ最近は規則正しい生活をしているよなぁ。食事も手早く済ませるための携帯食とかじゃないし。どうりで最近体の調子がいいわけだ。
今日の朝だって、いつもならもうちょっとのんびりしている。
ダニーさんたちの件を王都へ知らせに行くという緊急の用事でもない限りは、まだベッドの中だろう。
窓から差し込む陽光の眩しさで目を覚ました俺は、少し前から日課にしている朝市に顔を出すために、レメット、ミミューとともに外に出た。
「おはようございます、ウィルム村長」
「今日はいい天気ですなぁ」
「昨日の冒険者たちはそろそろ目を覚ましましたかな？」
朝市へ顔を出すと、早速商人たちから声をかけられる。
ちなみに彼らには、こちらが用意したルールの範囲内であれば自由にやってもらって構わないと

通達しておいてある。
それにしても、最初は違和感のあった「村長」って呼ばれ方だが、今ではすっかり定着したな。俺も抵抗なく受け入れられるようになった。頑張らないといけないなって身が引き締まる思いだよ。
みんなの手伝いをしていると、遠くから人の声が聞こえてくる。
どうやら、お客さんが集まってきたようだな。
主に港町のハバートと近くにあるベルガン村の人たちが多いのだが、最近では他国の人たちも増えてきている。寄港している間にこの村の噂を聞いた船乗りだったり、珍しい香辛料を求める料理人だったり、客層はさまざまだ。
しばらくすると、あちこちから威勢のいい声が聞こえてくる。
ここへ来た当初は俺とルディ、そしてレメットにアニエスさんたちしかおらず、村と呼べるような状態ではなかったが、今ではとても賑やかで活気のある場所になったな。
「市場は常に開いているけど、やっぱり朝市が一番盛り上がっているな」
「時間帯によって客層が違うみたいですね」
レメットの指摘した通り、朝市となると新鮮な食材が多く並ぶので、印象としては夜や日中よりも女性が多い。
「わぁ……これは珍しい魔道具ですね」

魔法使いだけあり、ミミューは商人たちが持ち込んださまざまな魔道具に興味津々。俺も工具とかいろいろと見て回りたいところではあるが、今日はそれよりも優先させなければならないことがある。
そろそろ王都へ向かおうとしたその時、背後から声をかけられた。
「よぉ、朝っぱらから盛況だな」
「アトキンス村長！」
声の主はベルガン村のアトキンス村長だった。
「おまえさんたちが繁盛してくれているおかげで、うちの村にも人が増えたよ。昨日の酒場なんて開業以来最多の客入りだったらしいぞ」
「そ、そんなに影響が……」
その酒場って、前に王都で秘書をしているジュリスと一緒に行った店か。
あそこの店主はいい人だし、好影響が出ているなら俺としても嬉しいな。
「最近はジュリスのように、村を出て働く若者が増えていたからなぁ。それで人が減り、どこか寂しさがあったけど……ヒカリ村のおかげでこっちも元気をもらえているって感じだよ」
「そう言ってもらえると助かります」
うちの村に人が集まると、近くにあるベルガン村にも好影響が出る。

ずっといい影響ばかりではないのかもしれないが、そうなったらうちでもしっかり対応していく準備は進めておかないと。

俺はレメットとミミューと一緒に家に戻って、顔を洗ってからキッチンへと移動。

そこではすでに、アニエスさんをはじめとするメイドさんたちが朝食を用意していた。

「ありがとう、みんな」

「これくらいは当然ですよ」

相変わらずなんでもそつなくこなすアニエスさんをはじめとした、アヴェルガ家のメイドさんたちはみんな優秀だ。おかげで俺も大助かり。

これまで屋敷で暮らしていた彼女たちにとって、この辺境の村での生活は不便だし不満があるんじゃないかってずっと心配だったが、以前アニエスさんから「みんなここでの暮らしを楽しんでいます」と報告を受けたのでホッとしている。

ここで気になることがひとつ。

「アキノたちはまだ準備中？」

朝食の場にアキノたちの姿が見えなかったのだ。

「すでに食事を終えて発たれましたよ」

「もう⁉」

いくらなんでも早すぎる気はするが……まあ、今回は人命がかかっているからな。焦るのはよくないが、迅速に動くのはいいことだな。

「俺たちも負けてはいられないな」

「そうですね。ダンジョンは国内の経済に大きな影響を及ぼすとお父様から聞いたことがありますよ……きっとガウリー大臣も張りきりますよ」

他国との貿易に関する条約改正って大仕事を終えてひと息ついているガウリー大臣には申し訳ないが、また厄介な案件を持ち込むことになる。ただ、あの人の性格を考えると、むしろこういうケースは乗り気になるんじゃないかなとも思う。

いずれにせよ、話をしてみれば分かるか。

朝食を終え、俺は最低限の荷物を手にしてからレメットとミミューを連れて外へ出ると、頼もしい相棒の名を呼ぶ。

「ルディ！」

近くの木の枝で羽を休めていたルディは、俺の声に応じて舞い降りる。相変わらず抱きしめたくなるくらいもふもふとした羽毛だ……って、今はそれどころじゃないんだった。

「王都まで頼むぞ」
「キーッ！」
いつものようにルディが巨大化し、その広い背中に乗って俺たちは王都へと急ぐのだった。

◇　◇　◇

王都へ到着すると、そのまま城へと足を運び、すぐに大臣秘書であるジュリスを呼びだした。
「どうしたのよ、アポもなしにいきなりやってくるなんて」
「悪いが、火急の事態だ。詳細な内容についてはガウリー大臣へ直接話をしながら説明していく」
「……分かったわ。ちょっと待っていて」
考え込んだのはほんの一瞬のみで、ジュリスはすぐに対応してくれるという。
話を持ち込んだ側が言うのもなんだが、すんなりいくとは思っていなかったのでちょっと驚いた。
「すまないな。無理を言ってしまって」
「どうして謝るのよ。あなたがそれほど言うなら、とんでもない非常事態ってことなのでしょうからね」
さすがはジュリス。俺のことをよく分かっている。

待つこと五分。
大臣に伝えに行ったジュリスが息を切らしながら駆け足で戻ってきた。
「いいわ。大臣の執務室で説明して」
「ジュ、ジュリスさん、大丈夫ですか？」
「回復魔法をかけますよ！」
「大丈夫よ、これくらい」
疲れているジュリスを心配するレメットとミミューだが、彼女は二の腕で額の汗を拭うといつもの笑顔を見せた。
「こういう仕事では緊急事態なんて日常茶飯事なんですよ。むしろ予定通りに進行するのが稀なくらい」
普段冷静な彼女が言うと妙に説得力があるな。
それほどいろんな案件が持ち込まれているってことなのだろう。
そんな状況下でもこうしてバッチリ対応できる能力を持っているからこそ、若いながらガウリー大臣に信頼され、秘書として働けるのだろうな。
——と、ここで意外な展開が。
「実は今ちょうど来客中なんだけど、その人もあなたの話をぜひ聞きたいって言っているの」

「俺の話を聞きたい？」
事態は一刻を争うため、できればガウリー大臣とサシで話を進めていきたかったが、ジュリス曰く、きっと俺たちの力になってくれる人物だという。
「一体誰なんだ？」
「会えば分かるわよ」
勿体ぶった言い方ではぐらかすジュリスだった。

そうこうしている間に気がつけばガウリー大臣の執務室前まで来た。
ジュリスが先頭で部屋に入り、そのあとから俺たちが続く。
俺たちの話を聞きたい客がいるらしいが……それは意外すぎる人物だった。
「エリさん⁉」
「やあ、ウィルム。元気そうで何よりだ」
ソファに腰を下ろしてガウリー大臣と話をしていたのは、アキノの母親で冒険者パーティー【月光】のリーダーを務めているエリ・タチバナさんだった。
「アキノのヤツは君の役に立っているか？　足を引っ張ってないか？」
「彼女にはいつも助けられていますよ」

「そうです。今やヒカリ村に欠かせない大切な存在です」
「アキノさんは頑張っています！」
俺だけじゃなく、レメットやミミューの言葉を耳にして思わず頬を緩めてしまうエリさん。
さて、流れで思わず世間話をしてしまったが、ここはガウリー大臣の執務室。
冒険者であるエリさんがなぜ大臣のもとを訪れたのだろうか。……もしかして、例のダンジョンに関することなのか？
「君のことだから、すでに察しはついていると思うが、ヒカリ村の近くで――」
「ダンジョンが見つかったんですよね？」
俺が「ダンジョン」の単語を出した途端、エリさんの眼光が一際鋭くなった。
「ほぉ、すでに君の耳にも届いていたか。ジュリスから急な用件と聞いていたのでもしやと思っていたが……いつダンジョンの存在に気がついた？」
「自分で気がついたわけではないです。サーデル王国からダンジョンを通ってヒカリ村へとやってきた冒険者を偶然保護し、彼から大体の事情は聞きました」
「何っ⁉　サーデル王国はすでに冒険者を派遣しているのか⁉」
これに驚いていたのはガウリー大臣だった。
「未発見のダンジョンがあると連絡を受け、こちらとしても今後の対策を講じようと話し合ってい

たのだが……」
やはりこれは外交上かなり厄介な案件のようで、ガウリー大臣は「うーん」と唸っていた。
サーデルがダニーさんたち冒険者に調査を依頼していたとなると、メルキスとしても放置したままというわけにはいかないだろう。
ガウリー大臣が頭を悩ませ始めたため、俺は話をエリさんへ振ってみた。
「エリさんは、そのダンジョンについてどこまでご存知なんですか？」
「詳しいことは私も知らない。サーデルで新しいダンジョンが発見されたという噂は耳にしていた程度だ。ただし、メルキスと非常に近いから気になってはいたんだ」
どうやら、冒険者たちの間では前々から噂になっていたようだ。
しかし、エリさんの口ぶりから察するに、このメルキス側からダンジョンに入る場所までは特定できていなかったようだ。それがついに特定され、まさかヒカリ村の近くだったなんて。
前々から村に暮らす商人たちと「ダンジョンが近くにあればギルドができるし、村がさらに発展するんだけどなぁ」と話していたが。
もっとも、サーデル王国といろいろ折り合いをつけなくちゃいけないだろう。ガウリー大臣に続いて、俺までもいろいろと考えすぎて唸ってしまう。
そんな状況を見かねたのか、エリさんが声をかけてきた。

「君たちはそのダンジョンへ行ってみたのか？」
「あっ、い、いえ、俺たちはまだ……でも、今日の朝にアキノたちがダンジョン内に取り残された人たちを救出するため、ダニーさんたちと一緒に向かいました」
「「ダンジョン内に取り残された人たち？」」
エリさんとガウリー大臣の声が重なる。
……しまった。このことをまだ言っていなかったな。
俺はダニーさんと仲間の冒険者たちについて報告する。
「なんてことだ。さらに状況はややこしくなったな」
ガウリー大臣のため息はより深くなった。
一方、エリさんは顎に手を添えて何やら熟考。
しばらくしてゆっくりと口を開いた。
「ヒカリ村から探索に参加した者の中で実際にダンジョンでの探索経験があるのはアキノだけかい？」
「えぇ。しかし、特に戦闘力の高いリディアとソニルというふたりの仲間を同行させています」
「そうか……」
急にエリさんの表情が曇る。

『迷宮渓谷』という、大陸でも屈指の攻略難度を誇るダンジョンを拠点としている一流冒険者パーティー【月光】のリーダー、エリ・タチバナさん――その娘で、実績も十分のアキノが中心となっており、さらに戦闘能力の高いリディアとソニルのふたりがいるから安心だと思うが……エリさんには何か引っかかる点があるようだった。
「あ、あの、そのダンジョンに何かあるんですか？」
「アキノさんが危ないとか⁉」
エリさんの様子を見たレメットとミミューが心配して尋ねる。
返答は――
「正直に言って……あのダンジョン、心配なところがあってな」
エリさんは眉根を寄せて言う。
「アキノでも難しいんですか……？」
「それは随分と厄介な話だな」
俺だけでなく、ガウリー大臣もその言葉に食いついた。
「いや、なんだか嫌な予感がするんだ。杞憂ならいいんだが、あのダンジョンはとにかく広そうでな」
「広さが問題なんですか？　危険なのはダニーさんたちを襲った強いモンスターじゃないんです

か？」
不思議そうに尋ねるレメット。
確かに、ただ広いだけだったらそれほど危険性があるとは思えない。しかし、俺は以前に、エリさんから似たような話を聞いた覚えがある。
「モンスターの危険性は百も承知だ。ただ、ある意味ではダンジョンの規模が最大の敵になりうる」
「ど、どうしてですか？」
「ルートが完全に明かされ、マップ化されているというなら危険度は下がるけど、手探り状態で入ろうとなったら状況が変わってくるんだ」
俺が代わりに解説すると、エリさんはゆっくり頷いた。
「その通りだ。そういう場所は一度迷ったら最後……地上には出てこられないかもしれない」
「そんな⁉」
真っ先に反応したのはミミューだった。
「私たち【月光】は、事前に探知魔法を使って簡易的にではあるがダンジョンの規模をある程度把握してから対策を練ろうとしていた――が、サーデルはかなり急いでいたようだな」
「利益優先のために早まったか」

エリさんもガウリー大臣もため息を交えながらそう語った。
だがそうなってくると問題なのは、ダンジョンへと足を踏み入れたアキノたちだ。
「あのダンジョンには他にもたくさんの冒険者がすでに足を踏み入れているのに……どうにかなりませんか!?」
動揺した様子でエリさんへと迫るレメット。
よほどみんなのことが心配なのか、必死の形相だった。
俺はそんなレメットを安心させるために優しく頭を撫で、それから胸を叩いてこう告げる。
「その点については問題ない。アキノたちをダンジョンで迷子になんかさせないよ」
「ウィ、ウィルムさん……」
「頼もしい言葉ではあるが、何か策はあるのか？」
今度はガウリー大臣が俺の言葉に食いつく。
この手の話で俺ができることといえば――もちろん、クラフトスキルを使って武器などのアイテムを生みだすことだが、今回は武器ではなく、アキノたちの居所を探るための探知系アイテムとなるだろう。
それを告げると、ガウリー大臣だけでなくエリさんもホッと安堵したようで、「君がいてくれてよかったよ」と笑顔を見せた。

ただ、それでも挑む対象は、広大なダンジョン。
どこに何が潜んでいるのか、まったくの未知数と言える場所だ。
「……どうやら、私もそこへ乗り込まなくてはいけないようだな」
エリさんはそう言うと腰を上げた。娘の窮地とあっては動かないわけにはいかないと判断したようだ。
「行ってくれるか、エリ殿」
「もとからあなたの許可が下り次第、すぐにでも探索に乗りだすつもりでいたからな。それに愛娘の危機も重なっていると聞いて何もしないわけにはいくまい」
すでにエリさんの全身は歴戦の冒険者が放つ強烈なオーラに包まれていた。
なんて頼もしいんだ。
静かに頷いたガウリー大臣は、続いてこちらへと視線を向ける。
「相手がサーデル王国ということなら……この件を君に伝えておいた方がいいだろう」
「えっ？　何かあるんですか？」
「うむ。今回のダンジョンの件が落ち着いてから話を持っていこうと考えていたが、もはやそうも言っていられない状況になったからな」
緊急性があるわけではないが、俺と関係の深い話があるってわけか。

……となると、勘だが、あの商会絡みか？
「実は今回の件で名前があがったサーデル王国なのだが……最近、国内に新しくバーネット商会の工房と事務所ができたという話がある」
予感的中。
「今の君にはもう関係のない組織ではあるが、一応は元職場だからな。耳に入れておいた方がいいだろうと思ってね」
「お気遣い、ありがとうございます」
直接サーデル王国へ行くようなことはないかもしれないが、知っているのと知っていないとでは対応が違ってくるからな。
それにしても……タイミングが良すぎると言うか。
新しいダンジョンが発見されたとほぼ同時に、バーネット商会がサーデル王国との関係性を深めているなんて。
この前の人魚族の国で起きたクーデターだって、商会が関与していた。
業績悪化もあってこれまで以上に怪しい仕事にも手をつけるようになっているらしいが、今回も実は裏で暗躍しているのかもしれない。
まあ、現段階では証拠と呼べるようなものもないので、頭の片隅にとどめておく程度にしておこう。
「さて、話もまとまったところで早速行動へ移ろうか」
エリさんがゆっくりとこちらへ歩み寄る。
「まずはウィルムが村長を務めているというヒカリ村に案内してくれ。それから、今回はうちのパーティー総出で当たらせてもらうから、少し大人数になるよ」
「分かりました」
言われてみれば、エリさんがヒカリ村に来るのは初めてだったな。
今回は事情が事情だけに、ゆっくりと案内はできないのが残念だ。
「ダンジョンの件は君たちに任せる。サーデル王国との交渉については、こちらで対応をしておくから」
「了解です」
ガウリー大臣からの許可も下りたことだし、ここから本腰を入れて調査ができる。
「ミミューさん、私たちもダンジョンへ入る準備を進めてまいりましょう」
「はい！」
これが初めてのダンジョンとなるレメットとミミューはちょっとテンション高めだ。ピクニック気分ではないのだろうが、ちょっと心配になるな。

というか、俺自身もダンジョンといえば、エリさんたち【月光】のメンバーと交渉するために入った迷宮渓谷以来となる。
おまけに今回はまだ発見されたばかりの新しいダンジョン。
情報がほとんどなく、実績と経験が豊富なエリさんたちベテラン冒険者にとっても難しい挑戦となるはず。
念のため、武器やアイテムはいっぱい持っていくとしよう。
なんだか今頃になって緊張してきたよ。

【幕間】暗躍するバーネット商会

ドノル王国にあるバーネット商会の本部。
ここでは今日も工房に勤める職人たちが劣悪な環境のもとで働かされていた。
「おらおらぁ！　もう納期が近いんだぞぉ！　気合を入れて働けぇ！」
疲労困憊（こんぱい）の職人たちを怒鳴り散らすのは、商会のトップであるジェフ代表のひとり息子で次期代表と目されるラストンだった。
「ったく、どいつもこいつも役に立たねぇ……また新しい職人を補充しねぇとな」
ラストンは酷くイラついていた。
これまで順調だったバーネット商会の売り上げは、ここ数ヵ月の間に過去最大の下落幅を記録しており、次々と有力顧客が離れていた。
原因はハッキリしている。

役立たずとしてクビにしたウィルムのせいだ。
彼がメルキス王国へと移住し、そこで懇意にしていた外交大臣や有力貴族に取り入って営業妨害をしているから――と、ラストンやジェフは思い込んでいた。
実際は、ウィルムの真面目さと職人としての腕が買われ、それに見合った報酬と環境が用意されているだけ。自分たちの不誠実な対応のせいで顧客が離れているという事実を、彼らはまったく認識していなかった。
職人たちに対する理不尽な態度もただのストレス発散であり、それがますます自分たちの首を絞めることになっているとは毛ほども気づいていない。
そんなラストンのもとに商会の職員がやってきた。
「ラストン様、代表がお呼びです」
「親父が？　ちっ、分かったよ」
工房を見回っていたラストンであったが、父親が呼んでいるとなったら応じないわけにはいかない。すぐさま工房横の事務所にあるジェフの執務室を訪ねた。

「何か用かよ、親父」
「ふふふ……喜べ、ラストン。いい知らせだ」

ここ最近の経営不調でずっと機嫌の悪かったジェフだが、この日はなぜかとても上機嫌でニコニコと笑みを浮かべるほどだった。
「いい知らせ？　なんだよ、それ」
「以前から進めていたサーデル王国との商談がまとまった。すぐにありったけの武器を馬車に詰め込んでサーデルへ向かうよう手配をしろ」
「ほ、本当かよ⁉　あれって望み薄だったんだろ⁉」
ラストンが驚くのも無理はない。
サーデル王国と交渉していたのは剣や弓など武器に関する売買であったが、質の低さなどを理由に難色を示されていた。
だが、ここでサーデルを口説き落とせれば今後十年は安泰となる大口の契約になるため、なんとしても成功させようとジェフ自ら足繁く王国へと通い、交渉を続けてきた。
それがようやく成立したというのだから、喜びもひとしおだろう。
「しかしよく首を縦に振らせたなぁ。サーデル王国はこちらの条件に納得していなかったって聞いたけど」
「そこは年季の入った交渉術というヤツだよ。……まあ、あまり口外できる内容ではないがな」
「っ！　なるほど。さすがは親父だ」

ジェフの邪(よこしま)な笑みを見て、ラストンは裏取引があったと瞬時に読み取る。
恐らく、商会は少し高めの金額をサーデルへ要求し、差額分は武器の買い付けを担当している者の懐(ふところ)に入るのだろう。
以前はメルキス王国でも同じ手口で長期かつ大型契約を結んでいたが、それに気づいたガウリー大臣によって前大臣が失脚。同時にこのうまい儲け話は消え去ってしまった。
それを今度はサーデル王国でやろうとしているのだ。
「最初の納品にはワシも顔を出すが、以降は息子であるおまえに一任すると先方には言ってある。すでに新しい工房と事務所の建設は終わっているから、しばらくはあちらで生活することになるぞ」
「へへっ、問題ねぇ。サーデルはメルキスほど大きな国じゃねぇけど、まあ国は国だからな。いろいろと楽しみだ」
「ここで顔と名前をしっかり売ってこい。期待しているぞ」
「任せとけって」
メルキス王国での計画は失敗に終わったが、今後のバーネット商会の発展を目指して、二代目であるラストンにはまずサーデルでそのキャリアを積ませようと目論むジェフだった。

第二章　初めてのダンジョン

ヒカリ村の近くで発見された新ダンジョン。
しかし、そこでは早速トラブルが発生し、多くの人が命の危険にさらされる状況となってしまった。
俺たちはなんとか彼らを救いだし、そして新しいダンジョンがどういった場所なのか詳しく調査するために、とある専門家の協力を仰ぐことにした。
その専門家こそ、アキノの母親で、俺がバーネット商会に勤めていた頃からお世話になっている冒険者のエリ・タチバナさんである。
彼女は、この大陸で冒険者をしている者ならば誰もが一度は耳にしたことのある一流パーティー【月光】のリーダーであり、さまざまな効果を持つ鞭(むち)を使い分けて戦うスタイルを得意としている。
その実力は折り紙付き。

実際、俺は過去に何度か彼女たちがメインで攻略している迷宮渓谷へ足を運び、この目でその実力を目の当たりにしてきた。

どんなに巨大で凶暴なモンスターを前にしてもまったく怯まず、的確な攻撃でバッタバッタと倒していく姿はまさに圧巻のひと言。

そんな彼女と【月光】のメンバーを一度ヒカリ村へと連れていくため、移動手段でもある巨大化したルディを呼びだす。

「この子に乗るのも久しぶりだな」

「キキーッ！」

「おや？　私のことを覚えているのか？　なかなか賢い子じゃないか」

そう言ってルディの頭を優しく撫でるエリさん。

襲ってくるモンスターには容赦ないけど、基本的に動物とかもふもふしたものが好きなんだよな。ソニルとかめちゃくちゃ可愛がりそうだし。

今回はガウリー大臣へダンジョンの件を話しに来ただけということもあり、武器やアイテムが揃っていないと言うエリさん。ヒカリ村へ戻る前に行きつけの店で必要な物を買い揃えると言って、仲間たちとともに王都の中央通りへと繰りだしていった。

というわけで、俺とレメット、そしてミミューの三人は城門前で待機中。

その時、レメットから質問を受けた。
「あの……ウィルムさん、少しよろしいですか？」
「どうかしたのか？」
「アキノさんのお母様――エリさんはどれほど強いのですか？」
これはレメットだけでなく、後ろにいるミミューも同じく気になるらしい。
まあ、確かに体格は周りの男性冒険者に比べると大人しいと言うか、迫力に欠けると言っていいかもしれない。アキノもそうだが、筋骨隆々としているわけじゃないし。だから強さが想像できないのだろう。
なので、俺は嘘偽りのない情報をふたりに教えた。
「強いよ。アキノやソニル、リディアがまとめて相手をしても止められるかどうか……きっと難しいだろうね」
「そ、そんなに……」
「あの三人も凄く強いのに、力を合わせても勝てないなんて……」
ふたりにはこれが一番伝わりやすいかな。
これは過剰な表現というわけではなく、本当にそれくらい強いんだよな、エリさん。
何せ、強力なモンスターが出没する迷宮渓谷を本拠地に据えて探索をしているわけだし。

ガウリー大臣は新たに発見されたダンジョンについて、仮にエリさんたち以外の冒険者が報告をしに来たとしても、調査を依頼するなら【月光】以外には考えられないだろうと言っていた。
それだけの実績はあるし、エリさんは信頼できる人物だからな。
他の冒険者からも文句は出ないだろう。
「これから一緒にダンジョンへ入るんだから、あの人の実力を目の前で見られるはずだよ」
「アキノさんたちよりも強いというなら、とても頼りになりますね」
「なんだか安心しました！」
レメットもミミューも最初は半信半疑だったようだが、俺やガウリー大臣の言動を思い出して大袈裟な話ではないと察したようだ。
まあ、実際ダンジョンへ行けばハッキリ分かる。
エリさんって、パーティーの仲間たちも優秀で強いんだけど、ここぞという時は自ら先頭に立って戦い、周りを鼓舞するタイプだしな。
そういえば、娘のアキノにとっては久しぶりの再会となるのか。
まだ一年も経っていないとはいえ、本人は喜びそうだな。
そんな親子の再会を実現するためにも、まずはダンジョンに行って安否を確認しないと。
まだまだ情報が足りないのでなんとも言えないが、ダニーさんたちを襲ったヤツ以外にも厄介な

モンスターが潜んでいる可能性だってある。
とはいえ、ソニルとリディアの他にダニーさんたちもいるし、アキノが苦戦を強いられる様子を想像できない。それこそ、エリさんのような頭のキレる実力者が相手というなら話は別だけど。

しばらくして大荷物を抱えたエリさんたちが戻ってきた。これらはすべてルディが足でしっかり掴み、運搬してもらう。
「重くないか？」
「キーッ！」
「ふっ、頼もしいヤツだ」
またしてもルディの頭を優しく撫でるエリさん。
手のひらから伝わるもふもふ感を堪能しているようにも見えるな。
荷物を固定し終えると俺たちは背中へと乗り、そのまま上昇。

◇　◇　◇

爽快な空の旅はあっという間に終わり、何事もなく無事ヒカリ村へと到着。

出迎えてくれた村人たちは、思わぬ来客に動揺する。
「あ、あれは、エリ・タチバナか？」
「冒険者パーティーである【月光】がどうしてヒカリ村に？」
「もしかして、あのダンジョンを調査するためか？」
「なるほど。その可能性が高いな」
村人の多くはその業界で活躍する人たち――なので、当然エリさんのことを知っている。
いきなりの有名冒険者一行の登場に驚く村人たちであったが、例のダンジョンの存在をすぐに思い出して納得した表情へと変わった。
とりあえず、集まってくれた村人たちにはここまでの経緯を話した。
サーデル王国側から来たダニーさんを案内役にして、うちでも戦闘自慢の三人娘と冒険者たちが調査するダンジョンだが、実はかなり攻略の難しい場所である可能性があり、ガウリー大臣からの紹介もあり、【月光】の面々を連れてきた。
以上の内容を村人たちに告げたあと、ダンジョンへ先行している者たちから何か知らせは入ってないかと尋ねてみる。
これに対して村人たちからは特に返答なし。
「私たちもすぐにあとを追おう」

「そうですね。アイテムの準備をしてきます」
やはり娘のことが気がかりなのか、エリさんはすぐにでもダンジョンへ向かうと言う。
俺たちもそれについていくため、準備に取りかかった。
ダンジョンの詳しい場所については村人たちに確認を取ってもらっているので、その案内で向かうことになっている。

「さて、何を持っていこうかな」
自分の工房へとやってきた俺は、ダンジョン探索の役に立ちそうなアイテムを愛用のリュックへと詰めていく。
「右も左も分からないダンジョンだからな。可能な限りアイテムを持っていきたいが、荷物が多くなって動きが鈍るのだけは避けたい」
戦闘力のない俺ではダンジョン内で足手まといになりかねない。戦いで役に立ちたいという気持ちはもちろんあるが、俺には経験がないからな。
「何か、魔道具以外でみんなの力になれそうな物はないか……」
工房を見渡していると、ある物が目に留まった。
それは――神杖リスティック。

立ち読みサンプル
はここまで

魔法使い垂涎の逸品だが、ミミューによる指導のもとで修業中のため完全にその力を使いこなせていない。
それでも最近では炎や水がちょっと出せるようになってきた。
戦闘では使えないかもしれないが、一応持っていくか。

リュックを背負って外に出ると、すでに他のメンバーは集まっていた。
「すいません、遅れてしまいました」
「我々も今準備が終わったところだ」
遅刻ではなかったようなのでひと安心しつつ、案内役の村人を先頭にしてダンジョンへと出発する。
「い、いよいよダンジョンですね」
「なんだか緊張してきました……」
今まで一度も足を踏み入れた経験のないダンジョンへの挑戦に、レメットとミミューのふたりはさっきまでとは打って変わって緊張気味。クーデターが起きた直後の人魚族の国も危険だったが、こちらはこちらで質の違う危うさがあるからな。
ダンジョンの広さに加えて、ダニーさんたちを襲ったモンスターの存在。